# 学校生活に対する意識の調査
## K私立中学生を対象にして

# School Life Attitude Survey
## A case of K private Jr.highschool

中島　豼[1)]，飯田頴男[1)]，藤田主一[2)]，森脇保彦[1)]，大泉佳子[3)]
（[1)] 国士舘大学，[2)] 城西大学女子短期大学部，[3)] 国士舘高等学校）

キーワード：学校生活，スポーツ文化

## Ⅰ．はじめに

我が国の子どもたちの学力は，国際的に見て成績は上位にあるものの，判断力や表現力が十分に身に付いていないこと，勉強が好きだと思う子どもが少ないなど，学習意欲が必ずしも高くないこと，学校の授業以外の勉強時間が少ないなど，学習習慣が十分身に付いていないことなどの点で課題が指摘されているほか，学力に関連して，自然体験・生活体験など子どもたちの学びを支える体験が不足し，人やものとの関わる力が低下しているなどの課題が明らかになってきているのが現状である。

そこで平成元年度より文部科学省が小・中学校の新学習指導要領が改訂導入され，新しく総合的な学習時間が抽入され，更に，学力低下の不安が高まった事などを受け審議会は教科書検定に新基準を見直し，色々の各界の意見もある中で指導要領を越える内容に記述を認めることを柱とする提言等が報告されている。

文部科学省平成15年度の学校教育に関する意識調査の結果，学校生活の満足感，授業の理解度ともに学年が上がるにつれ低下する傾向がみられた報告がなされた。

○　学校生活への満足感については，小学生の場合，楽しい（満足）53.1%，すこし楽しい（まあ満足）37.4%，あまり楽しくない（やや不満）5.7%，楽しくない（不満）2.8% 無回答が12%であった。中学生の場合は，満足22.3%，まあ満足55.4%，やや不満17.2%，不満4.8%，無回答が0.2%であった。

○　学校の授業の理解度については，小学生の場合，よくわかる22.8%，だいたいわかる46.8%，半分ぐらいわかる23.7%，わからないことが多い40.13%，ほとんどわからない1.3%，無回答が1.5%であった。中学生の場合は，よくわかる7.8%，だいたいわかる40.0%，半分ぐらいわかる35.0%，わからないことが多い9.8%，ほとんどわからない2.7%，無回答が0.7%であった。

しかし，他面では昨年の基本調査速報によると，病気やその他経済的理由を除く1ヶ月以上の不登校は小・中学生は過去最大の13万7000人で，最近10年間で倍増し，中学生は36人に1人が不登校という事になるとの報告もある。

（朝日新聞8月10日付け）

心理学系の学者の分類によると，その理由として「登校する意志はあっても何となく不安と言った情緒的混乱によるもの」「無気力」等と報告されている。

また，「いじめ」も社会問題化し自分中心，協調性の欠如，さらに仲間との関係づくりに腐心する姿を身近に感じ取っている人も多く見られる。（Dinks夫妻は2人だけの生活，子供はいらない）

また，ロジェ・ケイヨワのあげた遊びの6つの定義とは，①自由な　②隔離された　③未確定な　④非生産的な　⑤規則を持つ　⑥虚構（fabrication，fiction）〈組み立て，つくりごとをする〉さらに，あそびの基本要素とは，自由，創造，自発性，また，スポーツの語源は古代フランス語に発し（dispoter），「仕事から離れて……」（carry a way from work）を意味するものである。

また桑原武夫氏は1982年4月2日「スポーツ文化を考えるシンポジウム」の講演で「現代スポーツは政治，経済，軍事，宗教，芸術，科学，情報と並んで近代文明の一分野である。しかし，文明諸分野の中で近代科学と並んで最も新しいものであることに注意しておきたい。」と述べ。また，現代社会の文化を考察するためにスポーツの問題は避けて通れない。スポーツは現代人の生活に欠かせないが，そのスポーツがいかに遊びの精神を失い，競争や記録追求に傾斜しているか，政治や経済が複雑に絡んでいるか，こうした現実をとらえ，スポーツ領域に思想的にチャレンジする必要を警告している。（週刊エコノミスト1982．5.45.11合併号）

スポーツ種目も現在教材として知育，徳育，体育，と教育の重要な柱となっているが，しかし，桑原氏の20年前の予言通り現在のスポーツは「勝利至上主義」にはしり，ドーピングや審判員買収等の問題も世界のスポーツの祭典オリンピックにおいても問題になっている。

しかし，柔道の創始者である嘉納治五郎師範は「教育のこと天下にこれより偉なるはなし，一人（イチニン）の徳教広く万人に加わり化育遠く万世に及ぶ」また「教育のこと天下にこれより楽しきはなし，英才を陶録（トウージュ）して兼ねて天下を善くす，その身亡ぶといえども余薫（ヨイン）とこしえに存す」と述べている。

このような時代に我々は指導者として，健全なスポーツ活動を育てるための責任として，その重要な役割を少しでも果たし得るのではないかと思い，今回は柔道の創始

者嘉納師範の趣旨を体して，学校課外クラブ活動に所属している部員を対象に久世，二宮（1985）により作成された学校生活に対する意識の尺度を用いて，これらの実態を調査し，スポーツを行っている子供は学校生活に対してどの様な意識を持っているかを知ることにより，今後の指導に役立てることを目的とした。

## Ⅱ．研究方法

1．被検者

東京都内にある，K私立中学生176名，内，運動部員が96名，非運動部員が80名，男子生徒125名，女子生徒51名および，公立中学生150名，内，男子生徒が102名，女子生徒が48名，なお，全員に対して参加の動機，年齢，経験年数，また，両親からも子どもが柔道を始めて子供はどのように変化したか，指導に対しての意見等々を同時に調査した。

**平均値、標準偏差**

K私立中学校　N＝176

| | 学校適応 | 脱学校 |
|---|---|---|
| 平均値 | 2. 981 | 3.227 |
| 標準偏差 | 1. 105 | 1.379 |

公立中学校　N＝150

| | 仲間志向 | 孤立志向 |
|---|---|---|
| 平均値 | 2.954 | 3.257 |
| 標準偏差 | 1.139 | 1.364 |

2．測定項目

本研究は，質問紙法により，

（1）①学校適応―脱学校，15項目，　②仲間志向―孤立志向，11項目（下に掲示）

（2）尺度の特徴については，分析方法〈3〉をご覧下さい。

(1)，①「学校適応-脱学校」15項目，②「仲間志向-孤立志向」，11項目を用いた。

| | ①学校適応―脱学校 | | ②仲間志向―孤立志向 |
|---|---|---|---|
| 1 | 今の学校生活に満足している。 | 1 | 友達と一緒にいると楽しい |
| 2 | 学校での勉強は、将来の生活や職業に役立つと思う。 | 2 | 友達とできるだけ交わるようにしている。 |
| 3 | この学校に対して親しみを感じる。 | 3 | 親しい友だちがいる。 |
| 4 | 先生には安心して何でも相談できる。 | 4 | 勉強以外のことを友だちとよく話す。 |
| 5 | 学校で受けてる授業はよく理解できる。 | ＊5 | 友達にはあまり大事なことは話さない。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 6 | 学校の規則はよく守る方だ。 | ＊6 | 友達とのつきあいがうっとうしいと思う時がある。 |
| 7 | 学校の先生に対しては親しみを感じる。 | ＊7 | 仲のよい友人グループを持っていない。 |
| 8 | この学校の生徒であることを誇りに思う。 | ＊8 | 友だちとのつきあいよりも、自分のことを大切にする。 |
| ＊9 | 学校に行きたくないと思うことがある | ＊9 | 友だちと一緒にいるより１人でいる方が気らくだ。 |
| ＊10 | 学校に対して反発を感じる。 | ＊10 | 友だちと一緒なって勉強や遊びのグループをつくるのはいやだ。 |
| ＊11 | 学校の授業は時間のむだだと思うことがある。 | ＊11 | 友だちから相手にされなくてもかまわない。 |
| ＊12 | 授業中でも、おもしろくなければ別のことをしていてもかまわないと思う。 | | |
| ＊13 | 授業を受けているのが苦痛である。 | | |
| ＊14 | 学校を休みたいという気持ちになる。 | | |
| ＊15 | 私にとって学校はいごこちが悪い。 | | |

注：＊印は逆転項目。実施時には尺度名と逆転項目を示す＊マークは取り除く事が必要である。項目の配列順はランダムに並べ換える方がよい。

この尺度の特徴は学校適応を一つの尺度の得点でみるのではなく学校生活の適応度の高さ（①学校適応）と仲間との連帯志向の強さ（②仲間志向）の２つの尺度からとらえ類型化をを試みるところに特徴が見られると思います。

３．分析方法

１）採点方法

選択肢は２尺度とも

★　非常にあてはまるを，　５点

★　かなりあてはまるを，　４点

★　どちらともいえないを，　３点

★　あまりあてにならないを，　２点

★　全くあてにならないを，　１点となる。

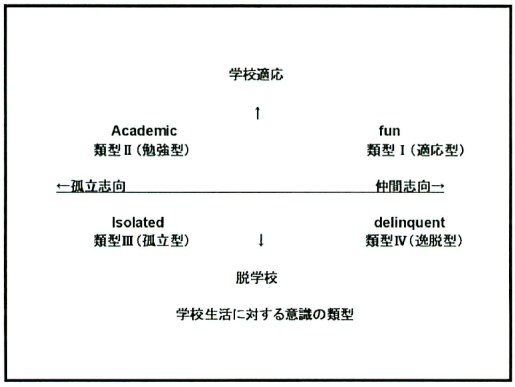
五一

２）類型化の手続

（１）学校適応と仲間志向の尺度得点の平均値と標準偏差を算出する。

（２）各尺度得点の平均値から＋１／２SD 以上得点が上回る。また，平均

値から－１／２SD 以上得点が下回る人を選出し，右上を類型１（適応型），左上を類型２（勉強型），左下を類型３（孤立型），右下を類型４（逸脱型）の４類型とした。




## Ⅲ．結果と考察

図１によりＫ私立中学校生徒全体 176 名，その結果，62 名が（114 名）

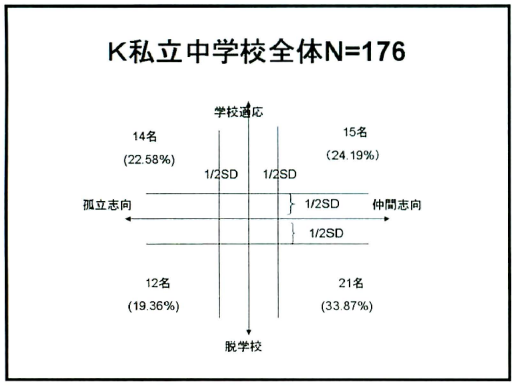
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=15 名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=14 名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=12 名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=21 名）

を図示したものである。



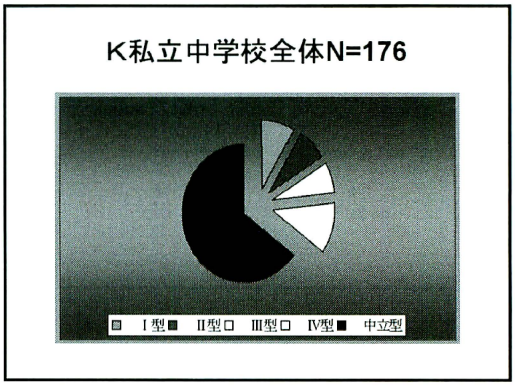




図２により公立中学校生徒 150 名，その結果，34 名が（116 名）

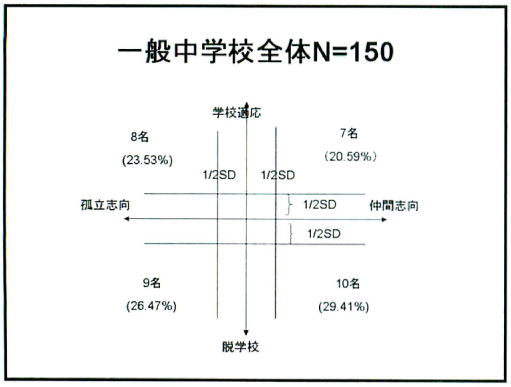
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=7 名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=8 名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=9 名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=10 名）

を図示したものである。



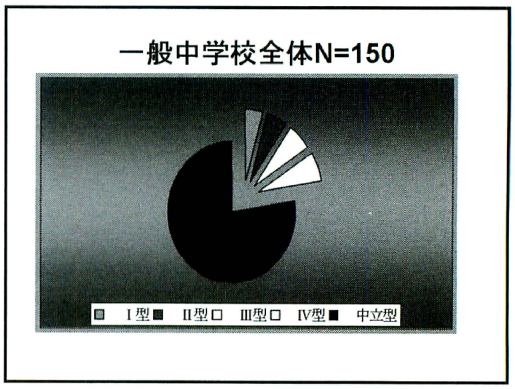




図3によりK私立中学校運動部員96名，その結果，35名が（61名）

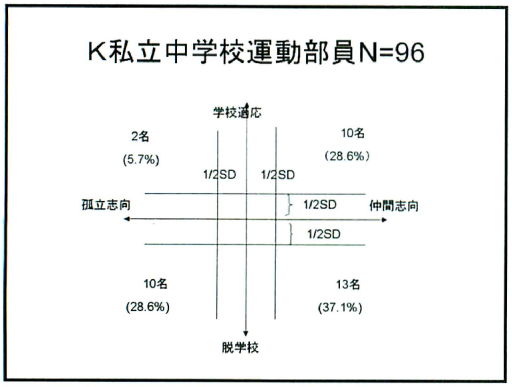
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=10名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=2名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=10名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=13名）

を図示したものである。



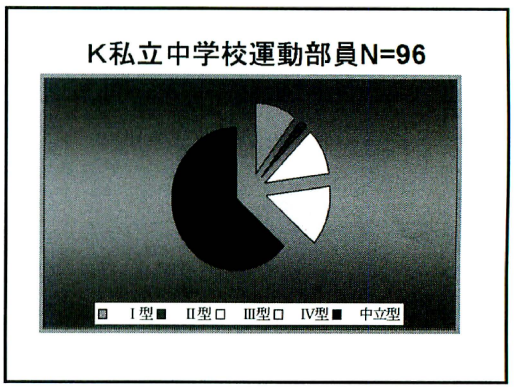




図4によりK私立中学校非運動部員，80名，その結果，31名が（49名）

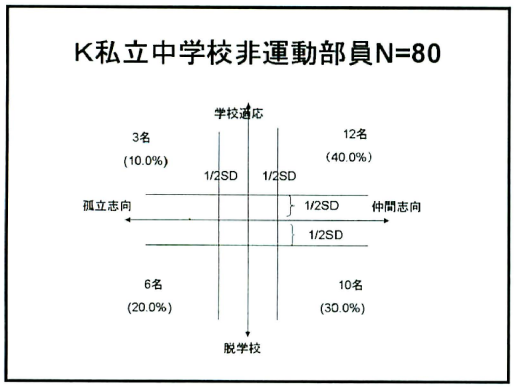
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=12名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=3名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=6名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=10名）

を図示したものである。



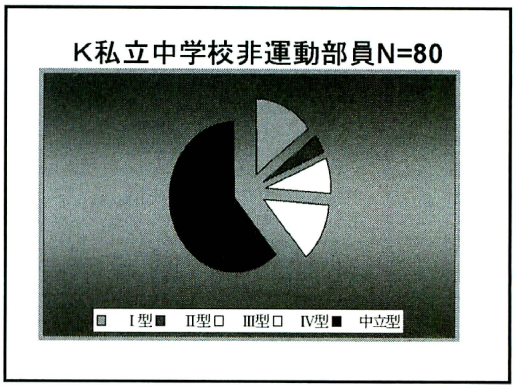




図5によりK私立中学校男子生徒，125名，その結果，57名が，（68名）

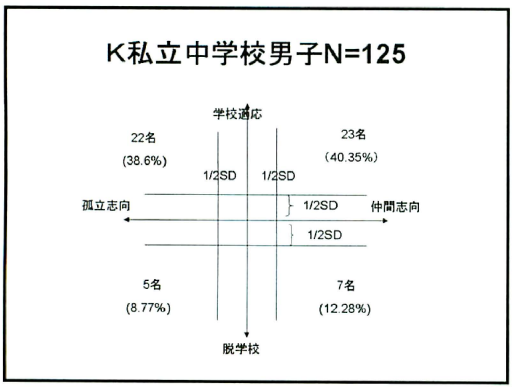
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=23名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=22名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=5名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=7名）

を図示したものである。



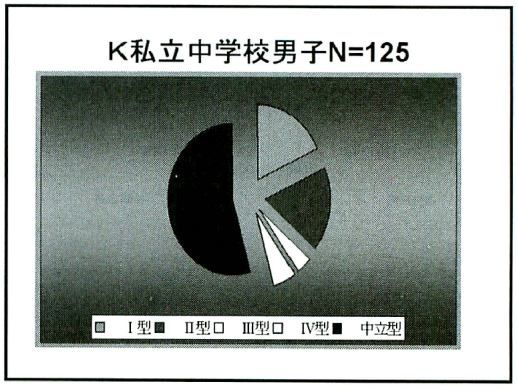




図6により公立中学校男子生徒，102名，その結果，44名が，（58名）

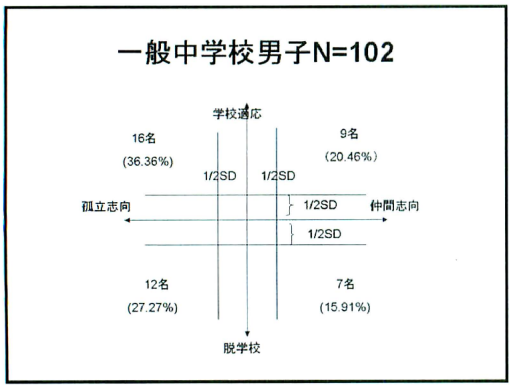
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=9名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=16名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=12名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=7名）

を図示したものである。



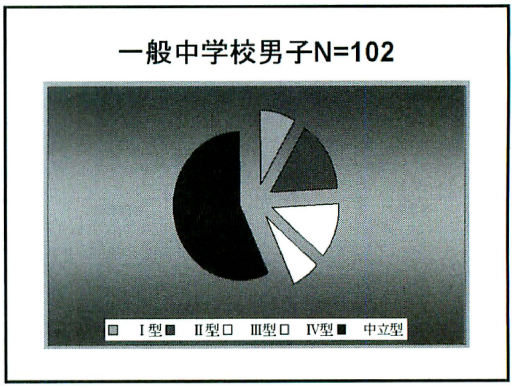




図7によりK私立中学校女子生徒，51名，その結果，15名が（36名）

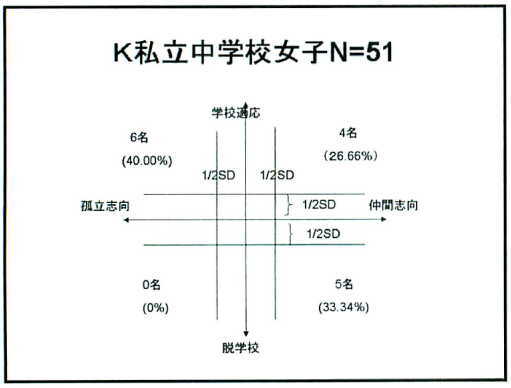
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=4名）

類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=6名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=0名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=5名）

を図示したものである。



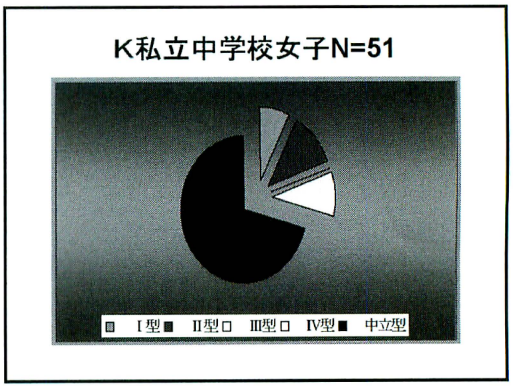




図8により公立中学校女子生徒，48名，その結果，12名が，（36名）

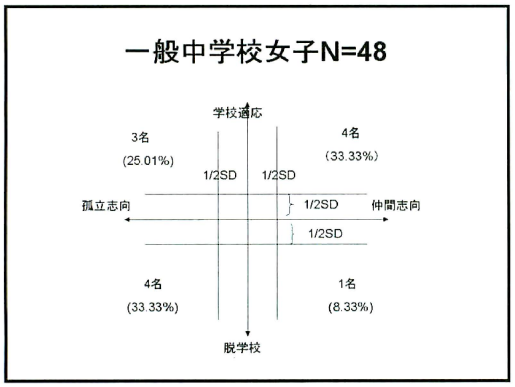
類型Ⅰ　適応型（学校適応かつ仲間志向）（Ⅰ＋Ⅱ=4名）

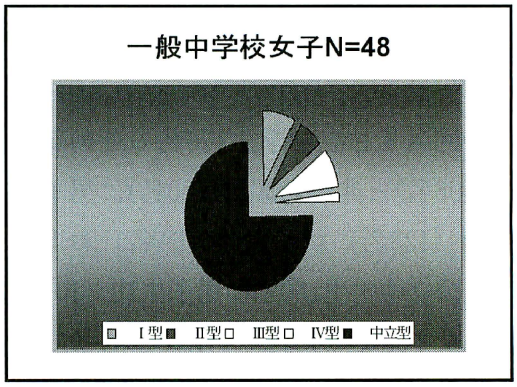
類型Ⅱ　勉強型（学校適応かつ孤立志向）（Ⅱ＋Ⅲ=3名）

類型Ⅲ　孤立型（脱学校かつ孤立志向）　（Ⅲ＋Ⅳ=4名）

類型Ⅳ　逸脱型（脱学校かつ仲間志向）　（Ⅳ＋Ⅰ=1名）

を図示したものである。




| | 類型Ⅰ適応型 | 類型Ⅱ勉強型 | 類型Ⅲ孤立型 | 類型Ⅳ逸脱型 |
|---|---|---|---|---|
| ①K私立中学校全体 (62 / 176=114) | 15 名(24.2%) | 14 名(22.6%) | 12 名(19.4%) | 21 名(33.9%) |
| ②公立中学校 (34 / 150=116) | 7 名(20.6%) | 8 名(23.5%) | 9 名(26.5%) | 10 名(29.4%) |
| ③K私立中学校運動部員 (35 / 96=61) | 10 名(28.6%) | 2 名(5.7%) | 10 名(28.6%) | 13 名(37.1%) |
| ④K私立中学校非運動部員 (31 / 80=49) | 12 名(40%) | 3 名(10%) | 6 名(20%) | 10 名(30%) |
| ⑤K私立中学校男子生徒 (57 / 125=68) | 23 名(40.4%) | 22 名(38.7%) | 5 名(8.8%) | 7 名(12.3%) |
| ⑥公立中学校男子生徒 (44 / 102=58) | 9 名(20.5%) | 16 名(36.4%) | 1 2 名(27.3%) | 7 名(15.9%) |
| ⑦K私立中学校女子生徒 (15 / 51=36) | 4 名(26.7%) | 6 名(40%) | 0 名(0%) | 5 名(33.4%) |
| ⑧公立中学校女子生徒 (12 / 48=36) | 4 名(33.3%) | 3 名(25%) | 4 名(33.3%) | 1 名(8.3%) |

また，男子は学校適応，仲間志向はこの尺度であった。学校適応を一つの尺度の得点で見るのではなく学校生活の適応等の高さと仲間との連帯志向の強さの二つの尺度からとらえ子供の類型化を試みるところに特徴があると思われる。

この結果より対象とした子供達は学校生活に対する意識は学校適応し，仲間志向も効果をあげていると推察される。今後更に経験年数の長短によって仲間志向等が影響していると思われる。また親から見て子供が柔道を始めてどのように変わったのかの調査に対して次ぎのような答えがあった。

1．精神的，肉体的にも強く，逞しく健康的になった。

2．先生や先輩など，尊敬できる多くの人と出会えた。

3．目標を持って行動が出来るようになった。

4．集中力がついた。

5．友達が増えた。

7．明るくなった。

6．礼儀正しくなった。

今回はK私立中学生176名の運動部員（96名）と非運動部員（80名），男子生徒（125名）女子生徒（51名）および，公立中学生150名の男子生徒（102名）女子生徒（48名）そして，K私立中学生（176名）と一般公立中学生（150名）を比較したが，学校適応，仲間志向とも他の孤立志向，脱学校との間に差は見られなかった。しかし，K私立中学校男子生徒に於いてのみ学校適応，仲間志向とも他の孤立志向，脱学校との間に若干の有意な差がみられた。

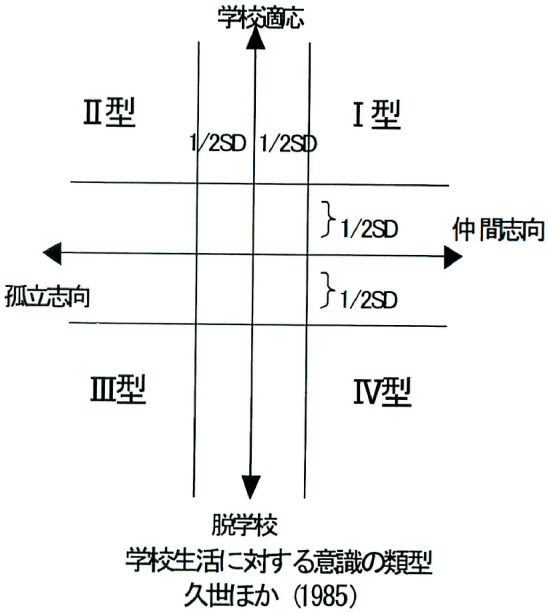
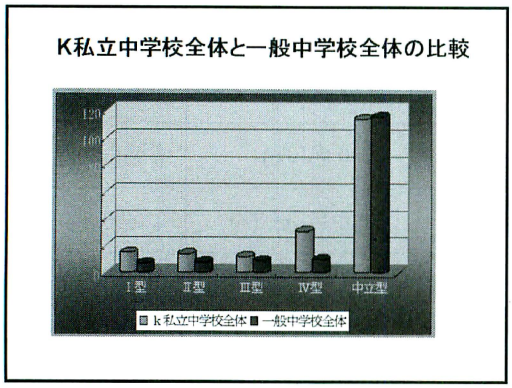
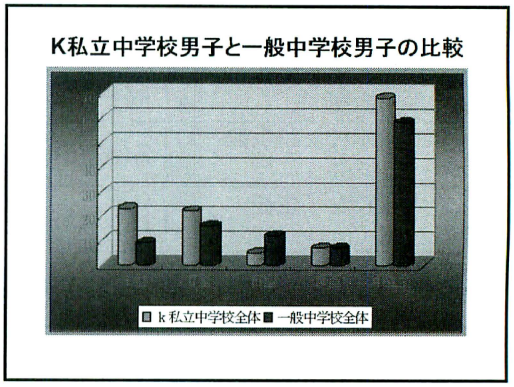
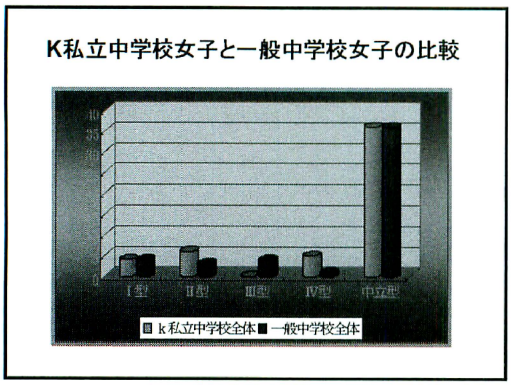
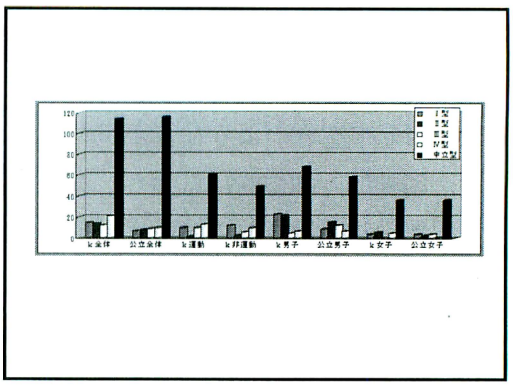



図１　学校生活に対する意識の類型
注：久世ほか(1985)より引用



## Ⅳ．まとめ

以上のことから，今回調査をしたＫ私立中学校は入学に対して受験をし，学校そのもの特徴を充分に理解し，また学校においても同等のレベルの生徒が対象であったためそれほどの差は見られることがなかった。しかし，男子のみに若干の差が見られたが，これは生徒自身が自己表現の現われであって充分に理解するものであると推察される。このようにＫ私立中学校においては運動部員，非運動部員にかかわらず，生徒全体に行き届いた教育理念を持って指導にあたっているとおもわれる。このようにＫ私立中学校全体に学校適応型および仲間志向型であり，学校生活にも適応し，生活習慣も順調な発達を示していると推察される。

さらに，調査を進め子どもたちが学校生活に十分な適応に役立てたいと考える。

なお，この論文の一部は，平成15年度日本武道学会第36回大会（中京大学）にて報告した。

### 参考文献

久世敏雄，二宮克美，大野久　1985「中学生・高校生の学校生活への適応に関する一研究」日本教育心理学会第27回総会発表論文集，p404-405.

二宮克美，久世敏雄，大野久，和田実　1987「高校生の学校生活への適応に関する一研究」日本教育心理学会第29回総会発表論文集，p604-605.

二宮克美，大野久　1990「学校生活における青年　久世敏雄（編）変貌する社会と青年の心理」福村出版，p157-182.

清水義弘，松原治郎，潮木守一，新井郁男，小野浩，菊池城司，竹内清 1978「地域類型別にみた高等学校の適正規模に関する総合研究」東京大学教育学部紀要，第17号 p1-45.

古市裕一　1991「小・中学生の学校ぎらい感情とその規定要因」カウンセリング研究，第24号，p123-127.

原岡一馬　1972「登校拒否傾向の要因分析」佐賀大学教育学部研究論文集，第20号，p67-90.

# School Life Attitude Survey
## (A case of K private Jr. high school)

Takeshi Nakajima* E.Iida* S.Fujita** Y.Moriwaki* Y.Oizumi***
(*Kokushikan University, **Jyosai woman's University, ***Kokushikan High school)

Key word : School Life, realm of sport

## Ⅰ. Purpose

New Education Ministry guidelines were introduced to elementary and junior high school and global learning hours are established. However, there is no end to the number of students who refuse to go to school and suffer from bullying at school and in a society. In the realm of sport, there is a tendency of "supremacy of victory". The doping problem is no less important.

Thus, this study investigates the student's adjustment at school and friendship using K private Jr. high school to utilize for budo, sports, and school educational guidance.

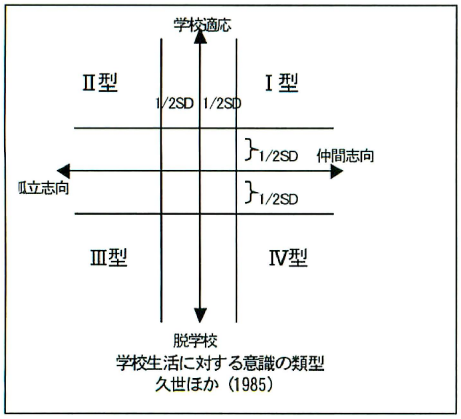
## Ⅱ. Method

1. Participants: Hundred and seventy-six K private Jr. high school students and 150 public junior high school students.
2. Measurements:
1) School adjustment-maladjustment (15 items),
2) friendship-isolation (11 items).
3. Analyses: Not just using one scale of school adjustment, but using two scales of school adjustment and solidarity with friends. Students were categorized based on each scale's mean ±1/2 SD.

## Ⅲ. Results and Discussion

| | private school | | Public school | |
|---|---|---|---|---|
| | adjustment | maladjustment | friendship | isolation |
| M | 2.981 | 3.227 | 2.954 | 3.257 |
| SD | 1.105 | 1.379 | 1.139 | 1.364 |

## Ⅵ. Conclusion




There was no difference among groups because students at K private junior high school pass the entrance examination and understand the school characteristics.

In addition, school requires students of same level. However, there are some differences among boys. It is understandable in terms of individual's self-expression and self-assertiveness. School guides all the students well with an educational philosophy. It was assumed that students at K private junior high school adjusted school well and developed successfully.